

# 防災は未来を語るもの

## 紀北中で石巻の被災者が講演

紀北町立紀北中学校は1日、防災講演会を開いた。東日本大震災の被災者が我が子を失ったことやその後の若者の取り組みを語り、全校生徒177人が防災のあり方や命の大切さを考えた。

県建設技術センターの協力で、講師に宮城県石巻市の佐藤敏郎さん(54)を招いて行った。

生徒のほか、住民も10人ほど参加した。佐藤さんは被災時、女川町立女川第一中学校(当時)の教師で、大川小学校に通っていた次女を亡くし、3年後に退職。現在は「小さな命を守る会」代表を務めている。

佐藤さんは被災前後の町の様子や動画などを織り交ぜて語り、「あの災害を受けても、子どもたちは町の誇りは『美しい海』と答えた。防災とは、郷土愛と志を育てるもので、あの日だけでなく未来を語るもの」と訴えた。

「停電で校内放送は使

えない。卒業式の準備で先生はいなかった。少し考えれば分かることなのに、人の想定はなんと甘かったんだと感じた」と不十分だったことを指摘。「どこかで自分たちは大丈夫だと思っていて、私たちは何年も油断を積み重ねていた」と防災の至らなさへの後悔を語った。

その一方で「子どもたちの元気な声に、どれだけ復興の力をもらったか」と話し、生徒たちが作った俳句を披露。2か月半後、母を失った子が迷いながら提出した『逢(あ)いたくて、でも逢えなくて、逢いたくて』

親友を亡くした子が半年後に書いた『戻ってこい秋刀魚(さ んま)の背中に乗ってこい』ほかにも「見たことな

い 女川町を 受けとめる』『故郷を 奪わないで』 手を伸ばす』『弟と久しぶりの 大ゲンカ』『家がない やっとわかった その(うしろ)』

『夢だけは 壊せなかった 大震災』など約20句を紹介し、「最初は言葉にしているのか迷ったが、現実や悲しみ、自身と向き合っていた」と話した。

また、被災した子どもたちが、半年で10000万円の募金を集めて21か所の津波到達点に石碑を建てている「いのちの石碑プロジェクト」や、語り部としての活動を紹介した。

震災の教訓を伝える語



東日本大震災で被災した佐藤さんが講演した

り部は、昨年11月に高知県で開かれた「世界津波の日」高校生サミットin黒潮にも参加した。一緒に逃げていた5人

### 二度とあってはいけな 命を救うのは判断と行動

続いて、全校児童108人のうち70人が死に、4人が行方不明となった石巻市立大川小学校について話した。

当時6年だった次女を亡くした佐藤さんは「子どもが数多く犠牲になったのに、曖昧なまま、やがて忘れられる。もう二度とあってはいけない」と話し、その日の大川小の状況を説明。地震が発生して校庭に50分待機した後、決められた避難場所まで津波に向かう形で避難してしまったことについて、「命を救うのは判断と行動。組織として意思決定できず、避難ルートの判断をミス

が津波に巻き込まれ『自分分は生きていていいのだろうか』と自問自答し続けた男子が、自分の経験を通じている様子を伝え、「被災を志に変えている子もいれば、まだ苦しんでいる子たちもいる」と話した。「3・11は私たちの足かせではなく、これからどう生きるかの指針になっている」と言葉も添えた。

最後に「全て震災の後に気付いた。失う前に気付けたら」と後悔を語り、「防災とは習慣と信頼をつくること。仕方があるが、一人一人が自分のこととして考えてほしい」と語りかけた。

3年の垣内淳宏君は「心に残る話だった。南

海トラフ地震もあるの で、この機会に学んだことを地域でも生かしていきたい」と話した。



講演に聞き入る紀北中の生徒